挑戦！中山道・六十九次―その1

日本橋から武州、上州、信州、木曽、美濃、近江、京都三条大橋まで

（日本橋・2010.11.17～高崎・群馬八幡 2011.3.2　）

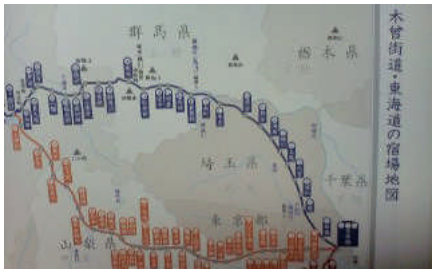
佐薙　恭　鈴木克夫　高崎治郎　松尾寛二　宮川次夫　石和田四郎

目　　次

1　日本橋　板橋宿　蕨宿　浦和宿　・・・・・・・・・・・・・・・・・　２頁
2　浦和宿　大宮宿　上尾宿　桶川宿　鴻巣宿　・・・・・・・・・・・・　６頁
3　鴻巣宿　熊谷宿　（籠原）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９頁
4　（籠原）深谷宿　本庄宿　新町宿　・・・・・・・・・・・・・・１４頁
5　新町宿　倉賀野宿　高崎宿　（群馬八幡）　・・・・・・・・・・・２０頁
附・オーション俳壇　・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８頁
附・中山道ウオークの記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・３１頁
附・中山道写真１～５－２　・・・・・・・・・・・・・・・・・３２頁

中村幸正君

日本橋



木曽街道

草津

吉田義則君

挑戦！中山道・６９次

炎暑の夏が漸く過ぎた１０月６日、リーダーの佐薙が、

「先ず、２街道完歩の四郎よ、全長５３４キロ（草津までなら２６キロマイナス）を、これから来年末までをかけて完歩する意欲と自信があるか？

準完歩の治郎兄含め、他の諸兄、２街道への参加のような形で参加されると期待してよいですか？宮さんの場合、今の体調など考慮して、どういう風に参加が可能ですか？難関の和田峠越えを日の長い来年５月ごろ実施とすると、今年１１月頃から複数回の日帰りで武蔵の國、上野の国の殆どを歩き、それ以降は多分３回くらいの３泊行程で和田峠を越え木曽路へ。

夏は休み、来秋再開し、更に２～３回の３泊行程で完歩できるのでは、というのが、おおよその考えです」と聞いてきた。

小生は「**自信はないが願望はある**」と返事をした。他の諸兄も夫々に前向きの返事。

かくして、中山道を歩く計画は動き出した。

心臓にバイパスを入れ、あとは脚力と体力をつけるだけという宮川、この夏以来、どういう訳か苗場、八海山、巻機山、（しかも、これが愛妻圭子さんのイニシアでやっているという）と続けざまに踏破し、俄然若返ったかと思える高崎、この治郎の勢いに気おされて「もうナンチクさんが居るから」とは決して申しません、と降伏した鈴木、松尾、初めから歯が立たないと諦めている小生が佐薙リーダーの下に集結。６９宿、全工程５３４キロの中山道に挑むことになった。

中山道は別名木曽路とも言われ、往時の東山道にほぼ近く、魅力が沢山ありそうだ。加えて、**大宮、高崎では岳友、吉田、中村両君の墓参りも出来、両君の鎮魂のウオークともなりそうだ。**

＜日本橋・全員集合（2010.11.17）凡そ２年前に比べて若々しさは変わらない？＞

（1）　２０１０年１１月１７日（水）　日本橋　板橋宿　蕨宿　浦和宿・浦和

距離 24.2K　、時間 7H05M（6H30M)、歩数 38.200

石和田　佐薙　鈴木　高崎　松尾　宮川

７：０５　日本橋発　奥州・日光街道分岐点　室町　須田町　神田川　昌平橋　神田明神

８：００　本郷・東大前、東大農学部前　日光御成道分岐点　白山　六義園　巣鴨

９：００　とげぬき地蔵（高岩寺）都電・荒川線　滝野川　掘割・千川上水分水堰の碑

１０：００　板橋宿（平尾宿、仲宿、上宿）石神井川・板橋の碑

１０：１０　縁切り榎前（皇女和宮ゆかりの榎）　蓮沼　志村一里塚　志村坂上・下　志村橋

１１：５５～１２：２０　昼食（そば屋）荒川　戸田渡船場跡　曲尺手橋

１３：２０　蕨宿・本陣跡　辻一里塚跡　六辻　調（つき）神社・狛兎（狛犬ではない）

１４：１０　浦和宿入り口（浦和駅）着

１５：００　大宮駅（浦和から電車）タクシーで　**吉田義則君の墓参り**

１６：００～大宮にて反省会

1）神田明神参拝

７３０年の創建（身の丈１寸８分の仏像が檜前浜成、竹成の網にかかって祀られた浅草寺は６２８年だから、その凡そ１００年後)、**祭神は大己貴命（だいこく様)、少彦名命（えびす様)、平将門（たいらのまさかど)。**江戸っ子に尊崇され江戸三大祭の一つとして大変威勢がいい。**ただ、平将門が祭られているのは不思議である。**（＊中世、将門塚の周辺で天変地異が頻繁に起こり、これが将門の祟りと恐れた当時の民衆を静めるために、時宗の遊行僧・真教によって神と祀られ、１３０９年に神田明神に合祀された）

将門の乱は平氏一族の争いから始まり、次第に国司、中央権力と対立、遂に関東を支配下に収めて自ら「新皇」と名乗って地方政権を樹立したが、京都の中央政権からは「朝敵」として、結局、同族の平忠盛などに滅ぼされたのだが、もともと、中央政権と対立する積りではなかったらしい。**むしろ東国では中央政権の圧政に対抗し、世に受け入れられない者の代弁者として、しかも壮絶な最期を遂げたというので、武士の時代の扉を開く魁であったという評価があるらしい**。また東国平氏の武士達からは大変な尊敬を受けている。

しかし、神田明神の祭神としての将門は平安時代は朝敵、中世では崇敬対象、更に明治時代の逆賊視、そして戦後の英雄化と、目まぐるしく変わっている。

もう一つは、神田明神の崇拝者は成田山新勝寺に参拝してはならないということで、これは今でも守られているらしい。

それは、成田山新勝寺が将門の乱を鎮めるべく、＜神田明神に参拝、お賽銭は挙げたよね！＞

朱雀天皇の密勅により下向した寛朝僧正が祈祷を行った場所に建てられた寺院であり、また京都高尾の神護寺から空海が彫ったといわれる不動明王を成田山新勝寺にご出馬（貸出料年１円、最近までこの賃借料は払われてきたと聞く）願ったという故事による。

２）皇女・和宮迂回の「縁切り榎」

板橋上宿、石神井川に架かる「板橋」の少し先に**「縁きり榎」**と言うのがあり、**第１４代将軍家茂に嫁す和宮が、縁起でもないこの榎を迂回したと言うことだ。**（＊この縁切り榎は「悪い縁を切る」「良縁を得たい」ということで古くから民間の信仰があった。もともとは榎（えのき）と槻（つき＝けやき）が茂っていて「エンがツキる」という言い伝えによるようだ。鳥居と小さな神社があり、その横には交番もあるが・・）

徳川幕府は国内に盛り上がる「尊皇攘夷」を旗印とした倒幕の勢いから、なんとか生き延るには「公武合体」・「京都と江戸」との結びつきを構築する政略結婚しかないとして、既に婚約者が決まっていた（有栖川宮）皇女・和宮のご降嫁を執拗に迫り、遂に兄・孝明天皇の苦渋の決断で江戸へ下ることになった和宮、この縁切り榎を迂回して（榎を覆ったとも言われている）江戸に入った。家茂と和宮は共に１６歳、お互いに相手をいたわり、いい夫婦だったそうだが、家茂は長州征伐のため出向いた大阪城内で僅か２０年の生涯を閉じてしまった。

「公武合体」は潰えて「大政奉還」となり、明治の世が来たが、縁きり榎は何を感じたろうか？

＜縁切り榎、悪い縁を切りたい＞

和宮は中山道６９次を２６日（1861.10.20、京都発、同 11.15 江戸着）**かかって江戸にお着きになられた。**（信州の小坂家で休息された折、小坂家の写真師が撮ったという和宮の唯一の写真と言うのを見ると何だか宮中での装束のように見え、特別に着替えでもされたのか、長い道中これで駕籠に揺られて居られたとは思えない）

１６歳の和宮にとって、見ず知らずの江戸への道中は察するに余りあるが、**そのとき乗られた駕籠が千葉県一宮の「東漸寺」にあるという。**

これは、**当時の一宮藩主、加納遠江守久徴公（加納藩１４代目の藩主）が和宮お迎えの責任者を務め、道中恙無く江戸までお連れした功績に対して、お駕籠を賜ったものと言う。**

中山道歩きでは諸所で「和宮・・」の話に出会うだろう。

（＊甲州道中の「明治天皇・・」よりはいいか。桶川宿には、和宮・本陣に宿泊・の付き添いをした山岡鉄舟が泊まったという「武村旅館」というのが今もあるという）

３）板橋・石神井川

板橋宿は大きな宿でなんと１５町５９間・１.７キロにも及び、平尾宿、仲宿、上宿とあるが、本陣は上宿に近く、板橋の名の由来になった「板の橋」は上宿の石神井川にかかっている。

この石神井川は小金井市の小金井ＣＣあたりから　西東京市、練馬、板橋、北区などを経て隅田川に注いでいる。板橋から見る川の流れは綺麗で春は両岸の桜が見事のようだ。

石神井川は、かって北区王子附近では渓谷（音無渓谷）を作り、幾つもの瀧を落としていた。滝野川の名前もこれによろう。**武蔵野台地を流れる川で渓谷を持っているのは谷田川の「等々力渓谷」と神田川の「御茶ノ水渓谷」くらいだそうだ。**しかし、今や大都会を流れる川は流路が変えられ、蓋が被せられ、セメントの護岸で囲われるという次第で、川という面影に乏しい。

（＊神田川は井の頭公園、善福寺池などに発し、中央線、西部新宿線などをくぐりながら高田馬場、お馴染みの御茶ノ水を経てこれまた隅田川に注いでいる）

４）調（つき）神社・こま兎

租・庸・調の調から来ている。調とは穀物を納める（取り立てる）意でこの神社の地には穀物を集める蔵が建っていたという。

この神社の創建は第９代の「開化天皇」の時代、紀元前１５６年だそうで、まさに神代の時代である。（＊しかし、租・庸・調は律令時代・７世紀頃の徴税方法だから、この神社は「調」の蔵ができるより遥か以前からこの辺りにあったことになるが）

その調・「つき」から番人？は狛犬ではなく狛兎であり、穀物を運び出す関係上、鳥居は邪魔になるということで建っていない。

＊　「狛犬」というが、イヌではない。ある種想像像上の獣、獅子を模しているように思える。古代インドで、仏の両脇に守護獣としてライオンの像を置いたのが狛犬の起源とも、古代エジプトやメソポタミアで神域を守るライオンの像が源流ともされる。日本には、中国の唐の時代の獅子が、仏教と共に朝鮮半島を経て伝わったと言われている。

＜調（つき）神社・守護獣はウサギ＞

朝鮮の「高麗」を通じて入ってきたから「コマイヌ」という説や魔よけに使ったところから拒魔犬・コマイヌと呼ばれるようになったということだ。

＜コマ兎＞

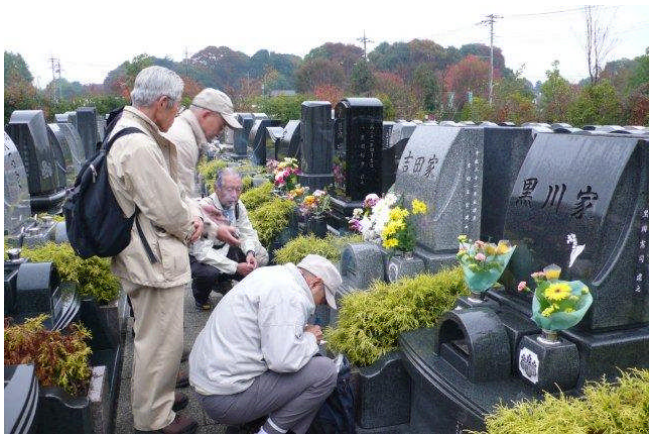
仏教と共にやってきたコマイヌを神社の方で多く見かけるのはどうしてだろうか？守護獣としては、他にイノシシ、龍、キツネ、オオカミ、また春日大社では鹿、弁財天では蛇、土地の伝承によっては河童などがあるらしいが「兎・ウサギ」は珍しい。

（２０１１年・に因んで狛ウサギを調べてみるか）

５）吉田義則君のお墓にお参り

大宮からタクシーで２～３０分、郊外の静かな霊園に「ヨッちゃん」は眠っている。

「玉善院義碩清卓居士」平成１８年１２月１８日没。



＜吉田家の墓・はや４年が経った＞

＊　さいたま市見沼区御蔵　＜彩（サイ）の國フオーシーズンメモリアル＞の＜Ｂ－１０－１８＞

松尾が用意してくれた線香をあげ、花をさし、「般若心経」をあげた。

山讃賦を歌い棺を送り出したこと、治郎が「ヨッちゃん、さよなら」と叫んだことを思い出した。

今回の中山道は高崎でＹ中の墓参りもしようと、なっており、はからずも亡き岳友の鎮魂の旅にもなりそうだ。

（２）　２０１０年１１月３０日（火）　浦和宿、大宮宿、上尾宿、桶川宿、（北本宿）、鴻巣宿

距離 23.8K　、時間 7H40M（6H30M）、歩数 40.400

石和田　佐薙　鈴木　高崎　松尾　宮川

（新検見川５：４５発、総武、京浜、高崎線　浦和駅６：５８着、浦和駅構内で迷子・遅刻）

７：０７浦和駅発　浦和・下、仲、上宿、北浦和、与野、さいたま新都心、氷川神社参道

８：３０　大宮宿　氷川神社石碑　北大宮、宮原、加茂神社　南方神社（諏訪神社）、庚申塔

１０：４０　上尾宿　中山道上尾宿の道標　庚申塔　北上尾　旅籠武村旅館（現在も営業中）

１１：５０　桶川宿着　～　昼食（地震あり）１２：３５　桶川発　島村家３階建土蔵　矢部家　大雲寺　桶川宿碑　北本宿の碑（立場があった）浅間神社

１１：４７　鴻巣宿着　人形の広田屋　本陣跡碑

１）南方神社（諏訪神社）、祭神は木花咲耶姫ほか

御祭神は建御名方刀美命（たけみなかたとみのみこと）、八坂刀売命（やさかとめのみこと）と**木花咲耶姫（このはなさくやひめ）**とある。建御名方（たけみなかた・・）から南方神社となったのだろうか？などと詮索していると、後から来た佐薙が「木花咲耶姫」について、滔滔と語り出した。それに依れば「ニニギノミコトと結婚し、一夜にして身ごもったため、他の神の子ではないかと疑われ、その

＜南方神社・祭神は木花咲耶姫他＞

疑いを晴らすため、貴方の子なら何事があっても無事に生めるはず、と産屋に火を放って、その中で**３柱の子を生んだ。これが、ホデリ、ホスセリ、ホオリで所謂、海幸彦、山幸彦だ。木花咲耶姫は大変な美人で小野小町と誰かと３大美人に数えられている・・**」と馬鹿に詳しい。神様と人間とあわせて美人ランクを作るのも妙だが､それ程神に詳しいとは思えない佐薙が何故か？と聞けば「産屋に火をつけて子を生んだことから**火の神様**として、**富士浅間神社の御祭神になっている**」と言うことだ。道理で富士山博士が知っているわけだ。　　（＊富士山本宮浅間大社の社伝ではこの神は**「水の神」**で噴火を鎮めるために富士山に祭られた　とあるそうだ。面白いがこれまでにしよう＊2011-1 月中旬、佐薙から富士山検定１級合格の連絡があった。一同感服！）

２）女郎買地蔵・治郎さんが神妙に？！

桶川宿には今も本陣、脇本陣跡のほか旅籠、旧家跡などがある。出羽の最上に次ぐ**紅花の生産地**として問屋が軒を並べていたとも言うが、この宿場の上方はずれに「曹洞宗龍谷山・大雲寺」（１５５７年開山）がある。

墓石が並ぶ一角に３体の地蔵があり、そのうちの一つが**「女郎買い地蔵」**と言われ、背中に鎹（かすがい）が嵌めこまれている。これは、この地蔵が夜な夜な飯盛り女に会いに行くので和尚が＜大雲寺・女郎買地蔵、治郎・神妙に拝む＞背中に鎹を打ちつけ鎖で繋いで、小僧の夜遊びを戒めたものらしい。

治郎さんが“しげしげ”と見入っていたものだ。一同、夫々に多少の覚えはあろうか？

（葛飾区金町の南蔵院には「縄で縛られた地蔵様」がある、泥棒よけらしいが地蔵様も大変だ）

３）寿命が延びるという橋を逆に渡った御仁？

＜広田屋の長寿橋、治郎は何かと旅を面白くしてくれて＞

鴻巣は岩槻と並ぶ「人形つくり」の街、宿場にかかった所に「広田屋」という大きなガラス・３階建ての人形店があった。その入り口に**「長寿橋」という真っ赤な太鼓橋があり、トップを歩いていた治郎が江戸側から渡った。渡り終えて看板を見ると「京都側から渡ると寿命が１年伸びる」とある。**

その逆は推して知るべし。渡ったのは何故か治郎だけ。「治郎さんよ、渡り直しなよ」と勧めたのだが、彼は頑なに拒んだ。あんまり長生きしたくないのかな。

因みに、広田屋の大きなショウウインドーには素敵な人形と共に**「種子島伝来の鉄砲」**が飾られていた。

これも何かの「縁」かな。

（＊ボランテイアの方が人形つくりでは高槻より鴻巣の方が上だが､あっちは宣伝が上手で･と）

４）「うどん屋」の看板が多い。何故か？（長々と畏れ多いが）

関東は「そば」が相場、しかし、街道を歩くかぎり、眼につくのは「うどん屋」の看板だ。

治郎に貰った**「東海道・木曽街道　広重　二大街道浮世展」の「九・熊谷宿　八丁堤ノ景」（渓斎英泉筆）**には、**「うんとん」**という行灯のかかった茶屋が描かれている。

「うんとん」は「うどん」である。

また、例によってネット・スタデイー、「うどん」と「そば」の歴史を調べる。面白い。

・「うどん」は８世紀、遣唐使によって中国から持ち 00 込まれた菓餅１４種のうちの１つ、索餅（さくべい）で、平安時代に製法が出来上がった「麦縄（むぎなわ)」が起源らしい。

<英泉画・熊谷宿　左の行灯には「うんとん」＞

だが、これは小麦粉と米粉を混ぜたもの、鎌倉時代に入宋した禅僧らが小麦粉で作る「麺」を持ち帰り**「切麦（きりむぎ)」**が誕生した。室町、江戸と時代を経るに従って製法も種類も多様化してゆく。**「うどん」を売る店は江戸時代初期には街道筋に普及し、江戸中期の元禄時代には江戸では「そば屋」を圧倒して「うどん屋」が優位になってい**

る。

それは、まだ「そば」が「そばがき」として食べられ「そば切り（細長いもの)」の製法が確立していなかったからだ。

（＊しかし、「うどん」は小麦粉で作るということから、なかなか贅沢な食べ物で農村では勝手に｢うどん｣を打って食べることを禁じるお触れが出されていたという。何たる百姓いじめか！）

（＊ワンタンに相当する中国語は「餛飩（コントン)」でこれをまた**「餫飩（ウントン、**コントン)」とも書き、これが同じ読み方の**「温飩（ウントン)」**となり、更に**「餛飩（ウドン)」**になった、そうだ）　ところで、「うんとん」は当然のことながら小麦の生産地と共に広がっていったようだ。最近の統計では**「うどん」の生産第１位は「讃岐うどん」の香川県（＊ここには、空海が「餛飩」を四国に伝えて「讃岐うどん」が誕生したという伝説があるそうだ）第２位は何んと埼玉県、・・第５位は群馬県（＊Y 中に伊香保の麓のうどん屋・「清水や」に連れて行ってもらったことを思い出す）だという。街道筋に「うどん」の看板の多いこと、納得した。**

小麦は「裏作作物」として、関東平野で広く栽培されて来ており、宜（むべ）なるかな。

我々のウオーキングでも街道の周辺に緑に萌えはじめた麦畠を散見した。

・さて、「そば」にも少々触れておこう。

原産地は考古学的にはエジプトのナイル川流域、バビロニアのチグリス・ユウフラテス、インドのインダス、中国の黄河流域、何のことはない４大文明の発祥地と重なる。

それだけ古くから人類の食と共にあったということだ。

「そば」、そのものが日本に伝わってきたのは、古く縄文・弥生時代らしい。

「そば」は所謂「救荒食物」で、荒地でも痩せた肥料不足の土地でもできて、年２回収穫できることから昔の農村では大変役に立ち、「そばがき」「すいとん」「蕎麦粒雑炊」などとして食用に供されてきた。

（＊子供の頃、栽培していたが種をまいてから６０日で収穫できると聞いたことがある）

ところが、「そば」が「蕎麦切り」として麺のように長くなったのは、江戸時代の初期、「つなぎ」が工夫されてからである。約４００年前ということになる。

そして、これが「つやつや、つるつる」と喉をとおるのが江戸っ子の気風とマッチして、江戸では大流行、**１８００年代初めの江戸の「食べもの屋」は約６０００軒で、そのうち半数が「そば屋」だったという。**

なお、この頃から、「そばつゆ」に銚子や野田の濃い口醤油が使われるようになり、それまでは大抵が「辛い大根のおろし汁」であったらしい。そこで大根の味の良いところが即ち蕎麦の名所であった、というのだが・・。

（＊信濃・信州を歩く我々、信濃を故郷とする宮川に敬意を表して。どうやら、「そば」は信濃國から中山道、甲州街道を通って関東へ、江戸へと出て来たものらしい、また「そば」の「更科」は、もともと信濃國・更級郡の「そば打ち」上手、布屋清助が領主保科家の殿様に招じられて江戸屋敷内に住むようになり、８代目布屋清右衛門が「更級」の「更」と「保科」の「科」を授けられたので、麻布永坂に**「信州更科蕎麦処」**の看板を掲げたのが始まりということ・・だけを付記しておこう）

＊食通（道楽）の松尾か鈴木よ、コメントがあろう。

５）昔の旅人の健脚に降参！

２日をかけて漸く「鴻巣」、５０キロ弱、１２里を歩いた。

それが「朝早く江戸を出発した旅人は夕方に鴻巣について宿をとり、翌朝再び西へ向かった」と「広重・・浮世絵展」に書いてあるぞと佐薙リーダーが言う。

佐薙からの激励と受け取ることにするか。吾らのペースのなんと弱々しいものであることか。

それにしても「広重の絵」に出てくる旅人、飛脚等は別として、そんなに速い足取りとは見えないんだけどなあ。

（３）２０１１年２月１日　　鴻巣宿～北鴻巣・吹上・行田～熊谷宿・上熊谷・籠原駅

鈴木、佐薙、高崎、松尾、宮川、石和田　距離 22.4K、時間 7H10（6H00）、歩数 36.000

（５：４５新検見川、６：４０上野、７：３１鴻巣駅着）

７：３５鴻巣駅発　７：４０　鴻巣宿街道，鴻神社，箕田観音堂、龍昌寺、氷川八幡神社

８：４０　北鴻巣駅入り口附近　鈴木君弟さん病状悪化との連絡、急遽帰宅、名古屋へ

９：３５　吹上駅入り口　吹上・間の宿石碑と案内板

１０：１０　権八延命地蔵堂、久下の長土手・荒川沿いの土手・関東一円眺望絶景（富士、多

摩、秩父、浅間、妙義、榛名、赤城、日光連山、筑波・・）行田駅、久下一里塚
久下神社、権八地蔵、久下の渡し跡　万平公園・熊谷堤の桜並木、熊谷駅南口

１２：２０　熊谷宿着・「藍屋」で昼食

１３：００　「藍屋」発、本陣跡、熊谷寺、八木橋百貨店（中山道が建物の中央を通っている）
八坂神社　石原駅入り口、新島の一里塚、忍領石碑、地蔵堂

１４：５０　籠原駅入り口、１５：００籠原駅、

１５：２０～１７：３０　「徳樹庵」にて反省会（反省と今後、回顧と展望）

１）北鴻巣附近で鈴木君急遽帰宅・名古屋へ

鴻巣駅７時半過ぎ全員集合、高崎、鈴木はスキーにでも行く出で立ち、快晴ながら流石は上州に近く、弱風ながら肌をさす冷たさ。駅を出て凡そ１時間後、鈴木のケイタイに「名古屋市立病院で治療中の弟さんの病状が悪化」との連絡。父上不在の戦中戦後を励ましあい助け合って生きてきた２歳違いの弟さん、彼は急遽、北鴻巣駅から帰宅、名古屋に向かう。

２）荒川（久下・くげ）土手から関八州一望

関東一円見渡す限りの眺望。丹沢、箱根、富士、多摩、秩父、浅間、妙義、榛名、赤城、日光連山、筑波まで。

広重や渓斎英泉の浮世絵（富士や浅間は誇張してあるが）＜標柱・中山道　こうのす　とある＞そのままだ。

佐薙が双眼鏡を取り出す。こうなると、「博士」の解説付きだ。

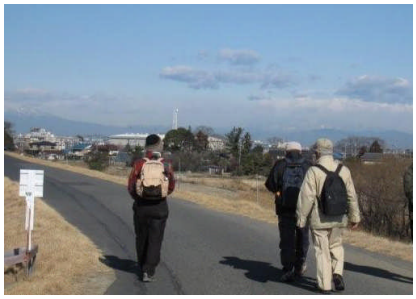
角度、位置、高さ、形・・、厳密である。荒船山か両神山かは後で調べる・・などと、アバウトな小生等恐縮の至り。

奥多摩の稜線からほんの僅かに望める**八ツ岳**も見逃さない。**浅間は鮮明だが谷川岳は日本海側から吹き付ける雪雲に覆われて見えない。**

暴れ川の異名がある荒川は昭和２２年の「キャサリン」台風の時、堤防が決壊して大被害を齎したというが、いまや補強された堤防の内側は耕作地となり、水は中央をささやかに流れている。

南西に富士　　多摩、秩父連山

北に浅間　　妙義、榛名、赤城



（谷川、日光）

３）埼玉とは？「幸魂（さきみたま)」からか？

「埼玉」とは？この２字の漢字だけからでは、何のことか全くわからない。

廃藩置県のとき、県庁が埼玉郡岩槻町に置かれる予定であった為、その郡名から「埼玉県」と名づけられ、その埼玉郡という地名の発祥の地は「北埼玉郡埼玉（さきたま）村」（現行田市大字埼玉）という。

しかしこれでも、この「埼玉」の意味は解らない。**名称の由来には、埼玉古墳群からとか幸福を齎す神の働きを意味する「幸魂」（さきみたま）からという説があるそうだ。このあたりか。**

奈良時代の「万葉集」に「前玉」「佐吉多万」（さきたま）という記述があり、平安時代の「和名類聚抄」には「埼玉」「佐伊太末」（さいたま）という郡名があるそうだから、古い。

４）埼玉（人）とは、その特徴は？「温和で控えめ」

現在の埼玉県域を通る中山道には、荒川を渡って最初の宿・蕨から浦和、大宮・・熊谷、深谷を経て利根川の手前、新庄まで、９つの宿駅があり、その距離、およそ１７里、６８粁である。（現在の埼玉県は東西１０３Ｋｍ，南北５２Ｋｍという）

しかし、この地域は古くは「武蔵國造」の時代、続く律令体制下でも、現在の東京、神奈川の北部を含める広大な「武蔵國」の北半分を占めるという地域である。

西、甲斐との間には秩父・多摩の山稜はあるとしても、どうも広大な関東平野の東、北、南には国境と思しき地理的、歴史的、文化的まとまりを見出しにくい。甲斐とは実に対照的だ。

＜秩父霊峰春曙・横山大観筆＞

古墳時代の武蔵國では上野国の有力豪族、上毛野氏（現在の群馬一体を支配）から東山道経由で先進文化が入っていたが、武蔵國の「國造」の地位争いで、大和朝廷側の笠原直使主（かさはらのあたいおみ）に、同族の小杵（おき）が（大和朝廷に逆らっていた上毛野氏の助を求めたが）敗れ、故に律令体制下では東海道が重視され、武蔵國は相模国と結ばれて、文化は主として東海道を経て齎された。（東海道重視、上野国から府中への道は「支路」となったことは甲州道中記で既に述べた）

中世の埼玉地域は小勢力が分立していた。江戸時代には江戸文化は中山道と日光街道を通って齎された。この時代、この地域は２０００余の小領主に分断されていたという。**今の埼玉県域に独自の文化を持つ有力な勢力は日本史上一度も現れること無く、人々は常に外部から先進文化を受け入れる立場にあった。**

確かに、江戸時代には河越（川越）、忍、岩槻、岡部藩などがあったが、地域の広さ、時間の長さ、などを見れば、**地域全体に個性的、特徴的なものを残すほどではなったと言えよう。**

よって埼玉県民は「**強者をたてて自らは一歩引く温和な気質になった**」と言われている。

されば傑出した人物は？**日本資本主義の生みの親、渋沢栄一（深谷出身）**をあげよう。

更に、「**平家物語」巻九、「一ノ谷」の平家衰亡の物語の脇役２人も挙げざる**を得まい。

５）熊谷寺・熊谷次郎直実（蓮生)、岡部六弥太、平家物語　/　大和田建樹・「青葉の笛」

武蔵國大里郡熊谷郷生まれの**熊谷次郎直実は「一ノ谷の合戦」で平家の公達・平敦盛の首を挙げたが、武功どころかわが子・小次郎直家ぐらいの若武者の命を奪ったという深い呵責の念に苛まれ世の無常と思いあわせて、遂に仏門に帰依すべく法然の教えを乞うた。法然は「罪の軽重をいわず、ただ、念仏だにも申せば往生するなり、別の様なし」と解いたと言う。**

法名は「法力坊蓮生」（れんせい　/　れんしょう）である。法然の勧めた念仏１日６万遍を守り通し、また、西を背にすると、浄土の阿弥陀仏に背を向ける（法然にも）ことになるといって、鞍を前後逆さまにおいて、背を西に向けず関東に下ったという。

蓮生坊・直実は法然の生誕地・美作国に誕生寺の建立をはじめ、東海道・藤枝宿に熊谷山（ゆうこくさん）蓮生寺、京都錦小路東洞院に法然寺など、数多くの寺を建立している（よく財があったものと感心するが）かなり美化されてはいようが直実は「真俗」を立派に生き抜いた「さむらい」と言う感を深くする。

＜蓮生山・熊谷寺＞　この熊谷市の「蓮生山・熊谷寺」は蓮生坊の生まれ、歿した地である。

＊　ついでに、もう１人、**同じく「一の谷の合戦」で平家の勇将・平忠度を討ち取った岡部六弥太忠澄は武蔵國大里郡岡部郷（現在の深谷市）の生まれである。**

奇しくも**源平の合戦・一の谷で平家追討に名を残した源氏の武将２人が熊谷と深谷の生まれ**とは歴史の絶妙な差配とでも言えようか。

『一の谷の　軍（いくさ）破れ　討たれし平家の　公達（きんだち）あわれ
暁寒き　須磨の嵐に　聞こえしはこれか　青葉の笛
更くる夜半に　門（かど）を敲（たた）き　わが師に託せし　言の葉あわれ
今わの際（きわ）まで　持ちし箙（えびら）に　残れるは「花や　今宵」の歌　』

＊　**若くして討たれた平敦盛が腰に携えていた笛は「葉二」（はふたつ)、「小枝」（さえだ）「青葉の笛」へと、その由来には奥の深いものがあるが、現在は須磨寺に展示されている。**

かって此処を訪れた時、これが８００年余を経たものかと痛く感慨を覚えたものだ。

＊　**「忠度」は歌の道で藤原俊成に師事し、平家都落ちのとき、わざわざ引き返して和歌の師俊成に詠草一巻（自らの秀歌百余首をのせた）を預けた（このため屋島に落ちて行く平家の船に間に合わなかったと言われる)。**

＜アツモリソウ・アツモリソウ属＞

＜クマガイソウ・アツモリソウ属＞（＊武士が矢を防ぐ為に背負った母衣（ほろ）に似ており、

赤っぽい方が平家・アツモリ、白っぽい方が源氏・クマガイ、そして「アツモリソウ属」となっているのが如何にも風雅？でよろしい。

＊討ち取られた武将の箙（えびら）には　次の歌が書かれていた。

“行き暮れて　この下陰（かげ）を　宿とせば　花やこよいの　あるじならまし”、

これで、平家の武将、平忠度　と分かったという。

藤原俊成は後白河法皇の命により勅撰中の**「千載和歌集」**に朝敵となってしまった忠度の和歌一首を**「詠み人知らず」**として載せた。それは、

“さざ波や　志賀の都は　荒れにしを　昔ながらの　山桜かな”

＊それにしても、**この文部省唱歌「青葉の笛」の作詞は何と鉄道唱歌でお馴染みの大和田建樹（作曲は田村虎蔵）である。**

この歌詞と調べは哀調寂々としていて、いまも心の底に刻まれている。

大和田建樹は鉄道唱歌・山陽道編の２番、３番、須磨のところで敦盛の悲運と衰亡の美を歌詞にしているが、上記の「青葉の笛」には及びそうにない。吉川英治の「新平家」も同じ。

大和田建樹はまさに明治・大正の詩人、文豪に比肩するのではなかろうか！

６）２時間余の反省会

そんなに反省することがあるのか？　　このところ佐薙が吾らの実力を熟知して無理のない計画を立ててくれるお蔭で、「五体不満足」も落伍することなく、深刻な反省の場は持たなくてすんでいる。

今後の予定についても、リーダーがコピーを配りスムースに進行する。

この間、せいぜい２０～３０分だ。

このところ、3時ごろに目的地に着く事が多く、「反省会」の場所を探す方が大変。それでも執念？交番や駅員に尋ね、あると聞けば引きずっていた足が急に軽くなるんだから。

２０～３０分で片付いた後、何を反省するの？

その土地の銘酒にありつければ一安心だが、・・　＜籠原で見つけた高級料理屋？徳壽庵＞

この頃では治郎の故郷、鹿児島の焼酎を掘り出して賞味することが多い。「島むらさき」には到底お目にかかれないが、治郎の選択は大抵好評のようだ。

こうなると、落ち着いて話は弾む。多少耳の遠い御仁が居て、話題が途中からとんでもない処へ飛び火したりするのも、却って面白い。結論を出す必要もないのだから・・。

＊　話題は多種多様、何しろ今年は「オーション会」結成６０年周年、失敗、ハプニング、苦楽の数々は限りない（＊山欽ゼミの俊秀Ｓが現代数学は可だったなんて、のもあって、俺は何勝何敗だった、俺は、あいつは、ともうこの世にいない仲間の成績までご丁寧に出てくる始末だ)。だが、懐旧談にだけ浸っているわけではない。６０年を期して「唐松」あたりに登

るかなどと「前向きな話」も出る。発言権放棄の御仁もいたが・・。
かと思えば、急に「塩野七生」の「ローマ人の物語」が話題になり、「“よくあれだけ”とは思うが文章が下手だ」、なんて大層なコメントが飛び出して熱を帯びる。

反省会の特徴の一つは、宿題が出たり、メンバー夫々が関心やテーマを見つけたときは、密かに持ち帰り、次回以降に披露することだ。よって「反省会」は際限なくつづく。
注文した焼酎が底をついたあたりが、その日の幕切れとなるだけ。
＊　今回のトピックスの一つはＭが「隣組ゴルフ」の帰り、妙齢の婦人と２人だけでタクシーに乗ったばかりに、
＜徳壽庵・料理はこれから、反省会もこれから＞　　腕に抱きつかれ、ぐっと身を預けられちゃって。ご町内へ広まったらえらい事になるが・・なんて話。
リスキーながらアドヴェンチャラスな気分もあって、みんなの興味と感心をそそり、連鎖反応をよんだ。今後が楽しみ。みんな男だから。益々達者で話に花を咲かせたいものだ。

（４）２０１１年２月１６日・快晴　籠原～深谷宿～本庄宿～新町宿　（武州から上州へ）

佐薙、鈴木、高崎、松尾、宮川、石和田　距離 25.3K、時間 7H35M（6H25M）歩数 35.000

７：５０　籠原駅　７：５５　中山道・籠原発　（５：１３新検見川発　籠原７：２７着）
９：１５　深谷宿　本陣遺構案内板　常夜燈　瀧宮神社・宿根　岡部（南）岡部（北）
１０：４０　百庚申と八坂神社　岡　小山川（眺望良し）牧西八幡大明神　旧家・内野歯科
１１：４０　**「六助うどん」昼食・超満腹～１２：４０**「六助うどん」発
１３：０５　本庄宿着　本町・中町・上町・新田町　金鐙（かねさな）神社　浅間山古墳
神保原駅入口　金窪神社　金窪城址入口　勅使河原（北）神流（な）川　＜上州＞
神流川古戦場跡碑　常夜燈　八坂神社　諏訪神社　浄泉寺　明治天皇行在所公園
１５：３０　新町宿着　駅前・万久馬（反省会）

１）谷川岳にでも登る？　その出で立ち！

予定通り籠原駅で集合、**いざ出発となったら治郎が例によってリュックをいじり始めた。何事ならん？！聞けば圭子さんの勧めで３本爪ほどの「アイゼン」を仕入れてきたらしく、これをリュックに格納し直すという。前々夜の降雪、上州の風と気温を考えれば、まあいいか、圭子さんの言いつけだし**＜治郎がアイゼンをリュックに＞

２）深谷宿・遊女１００人、深谷葱

「岐阻街道深谷之驛」と題する「溪斎英泉」の「道中絵」には豪奢に着飾った芸岐たちがあだっぽい仕草で歩く姿が描かれている。隣の「鴻巣宿」にはこのような女性が居なかったため、**深谷宿は飯盛女が多く宿泊客で繁盛したという。**

＜古風な造酒屋・七ツ桜＞

吾らはその「残り香？」でもあるまいかと、この町を歩いてみたが面影はとても見つからなかった。古びた造酒屋が２～３軒、遊女も葬られたかと思えるお寺が幾つか、有名なレンガ工場（東京駅のレンガは深谷産とか）は街道筋からでは見えなかった。

宿はずれで漸く有名な**「深谷葱」**にお目にかかれた。

＊葱は中国西部が原産地で日本でも奈良時代以前から栽培され「日本書紀」にも記載があるそうで、江戸時代中期には全国各地でその土地の気候風土にあった葱が栽培されていた。

深谷では藍、桑などの栽培が思わしくなくなった明治の初期ごろ、葱に転換し、利根川沿いの肥沃な土地を利して白身の多い質の高い葱が作られるようになったという。葱は１年中収穫されるが、特に秋から冬にかけてのものが「糖度１０～１５度」もあって珍重される。まさに冬場の鍋物、すき焼きなどにうて付けの具材。何故、そんなに甘いのか？？

＜深谷葱と赤城山＞

吾らはこの深谷を午前９時過ぎには通過してしまったので、臭いをかぐことも出来ず、**名物の「煮ぼうとう」にもお目にかかれなかった。**

松尾さん、ご免な、また出直すか？

３）快晴、絶景、関八州

珍しい「百庚申と八坂神社」を過ぎて、利根川支流の小山川に架かる「滝岡橋」辺りからは関**東一円の絶景を恣にできた。浅間はもとより前回（２月１日）は見えなかった谷川岳をはじめ上越の山々、日光白根、男体山、などが白銀に輝き、関八州、思いのままの眺望を満喫、赤城や榛名はぐっと近づいてきた。**

＜遠方の白い峰々は谷川岳とその連峰＞

＜日光連山が白く望める＞

俳人・宮川はこの絶景をめでて数句をひねった（後掲）

４）「六助・うどん」　に圧倒される

松尾が「胃袋受難？！親切なオバチャン、有難う」と吐露した「六助・うどん」での物語りの次第は以下の通り。

元小山川の橋の袂に「六助　うどん」の看板を発見、案内の地図には「**六助うどん、麺が太い**」と書いてあった。

昼少し前というのに店内はもうかなりの客だ。

６人向きの一角を与えられて、“やれやれ“、壁に貼りだされた名物？メニューなどを一渡り吟味の後、自分の胃袋はミニ・サイズと自認？している鈴木がやや控え目にか**「肉のつけうどん・中」**を選択、佐薙以外の４人が同調。　　＜元小山川の橋の向こうに看板あり＞

佐薙は「辛味うどん」なるものを注文した。

ややあって、何時も写真撮影に忙しい松尾がオネーチャンを呼んで**「俺も辛味うどんを」**と言い出した。

注文変更かと思いきや、「**追加だ、シエアーすればいいだろう」**だって（常に食の探求に前向きな松尾だワイ）

＜注文後、焼酎の品定めをして待つ面々、ごく普通の光景だ＞

オネーチャン、一瞬戸惑ったようだったが**「お客さん、それは無理ですよ」**と。

松尾はもとより一同大いに驚愕、客の注文を断るとは！・・。

＜写真では実感が掴めない？＞

ややあって、眼前に運ばれた件の「うどん」、“いざ見参！”と言わんばかりの山盛り、太くて歯ごたえ充分で　＜松尾さん！＞

２人分の昼食に充分だったとか。

幾ら頑張ってもなかなか山は低くならないボリューム。**やがて勝負？はついた。鈴木が先ず１/３ほどを残して万歳（中山道　うどんの峰を　越えそこね・克夫）、治郎がこれまた珍しく平らげられなかった（入れ歯のせいばかりではなさそう。**そうだ、朝、圭子さん謹製？の朝食をたっぷり詰め込んできたからに違いない）彼は残りを袋に入れて持ち帰り、翌日の

６人の成績は、宮川が優勝、２位松尾、佐薙、石和田の順でゴール・テープを切った。

宮さん、体調回復間違いなしだ！

向学のため厨房を覗いて聞く。麺は勿論自家製、茹で上がり「中」で７００グラム・・、と逞しいおじさんが話してくれた。改めてメニューを見ると「**うまくてびっくり、やすくてびっくり、ボリュームでびっくり　小、中、多」とあった。**

看板に偽りなしか,「中」は６８３円だった。

試みに佐薙が注文した「辛味うどん」の大根のすり身を舌先に乗せてみたがやや甘味があった。（＊**芭蕉は「身にしみて　大根からし　秋の風」、これは秀句の１つと言われ、**「更科紀行」にあるもので、１６８８年に信濃国・木曽のあたりで詠んだものと言われる。やせ地の大根ほど辛い。芭蕉も大根の摩り下ろしで「そば」でも食べたのか？小生の経験では陸奥・遠野の駅前のが一番だった）何時もより昼食時間も長かったようだ。佐薙が言う。俺たち子供の頃は「**出されたものを残しちゃいかん」**と躾けられたよな。それが身についているのか、胃袋に詰め込んでの足取りは、暫くの間、やや重かった。でも満足々々、貴重な？経験でしたぞ、上州で、Ｙ中！

５）神流川の合戦、関東管領？とは

利根川の支流、神流川を渡って上州に入ったところに**「神流川古戦場跡」の碑があり、「１５８２年、関東管領・滝川一益と北条氏直が戦った関東では最大の野戦」とあった。**

申し訳ありません！「将門の乱」か「小田原城落城」くらいしか知りません。勉強します。

＜神流川古戦場跡碑」と「案内板」＞

＊　**１５８２年とは歴史が大きく動いた年のようだ。**

○**「武田・滅亡」**1582・3・11　織田、徳川、北条等に攻められ、天目山の戦いを最後とする。　論功行賞で滝川一益、上野国と信濃国・小県と佐久２郡をもらう。他に穴山梅雪、河尻秀隆、森長可にはそれぞれ分与あるも北条にはなし。

○**「本能寺の変、**信長、長男・信忠没」　旧暦 1582・6・2、現暦 6・21？

○**「神流川の戦い」**　1582・7.・5～7・8　滝川一益、北条氏直が対戦、一益側死者 4000 で大敗。碓井峠、小諸を経て、本拠地の伊勢・長島城に敗走。

○**「天正壬午の乱」**1582・6～10・29　北条、徳川が信長没後の甲斐、信濃、上野の支配権を巡って争う。甲斐、信濃は徳川、上野は北条で講和。

＊　**滝川一益が「関東管領」とあるのは疑問**

○**「関東管領」**は南北朝から室町時代に、室町・足利幕府が設置した「鎌倉府」の「鎌倉公方」を補佐するために置いた役職で当初は「関東執事」と呼ばれた。

鎌倉公方の下にありながら、任命権は将軍にあった。

○**「鎌倉府」**の「鎌倉公方」は足利尊氏が嫡男の足利義詮を鎌倉から京都へ呼び戻し、代わ

りに亀若丸（基氏）を関東統治のために派遣した謂わば将軍の代理で、**「管領」とはこの幼い基氏を補佐する為に「執事」と呼ばれる補佐役を置いたことが始まりである。**

京都にも将軍を補佐する執事（後の管領）がいたため、これと区別するため「関東執事」と呼ばれた。

○この「関東執事」（管領）は初期には斯波氏、高氏、畠山氏、上杉氏が程よく交代で就任していたが次第に上杉氏に独占され、最終的には、上杉氏が世襲してゆくことになる。

初代、斯波家長（1336～37）２代上杉憲顕（1338）３代高師冬（1340～1351）、４代上杉、高、高、７代畠山国清（1353～61）ときたが９代上杉憲顕（1366～68）からは上杉が独占し**２７代上杉輝虎（謙信）（1561～78）まで続き、実質的には此処で終わっている。**

（従って滝川一益が「関東管領」というのは「自称」かも知れず、或いは後世の人達がそう呼んだのかもしれない。「公方」「管領」の終末期には「管領」を勝手に名乗るものがあちこちにいたらしい。例えば「安房・里見氏」などもそうらしい）

○他方「鎌倉公方」は室町幕府の征夷大将軍が関東十ケ国における出先機関として設置した鎌倉府の長官で**初代足利基氏（1349～67）から５代足利成氏（1445～55）**、そして（本拠地を下総國・古河に移したので「古河公方」と呼ぶ）**「古河公方」として５代足利義氏（1552～83）まで続いた事になっている。**

○しかし、これら「公方」、「管領」という体制は約２５０年近くの間、ご他聞にもれず地方豪族を巻き込んだ権力争いに明け暮れていた。殊に「公方」の在所が鎌倉から古河に移った１４５５年の「享徳の乱」は「応仁・文明の乱」（1467～77）に匹敵し、**関東における「戦国時代」の幕を開けたと言われている。**

この混乱の時代に虎視眈々と勢力拡大を狙っていたのが**「伊勢新九郎長氏・北条早雲」**（1432～1519）であったと言え、後北条５代約１００年の天下を築いたといえるのではないか。

（内部で争っている間に「あぶらげ」をさらわれる習い、今の政権党もまた同じか！）

６）神流川の源流は三国山、学友・河口君日航機遭難の御巣鷹山附近

＜神流川の橋の袂に立つ見透灯篭＞

利根川の支流、「源流は群馬、長野、埼玉の県境三国山・１８１８米、近くに御巣鷹山がある」と山博士・佐薙がすぐメールで知らせてくれた。

‘８５年夏、日航機遭難の御巣鷹山といえば学友・河口博次君だがそれと同時に救助に地元、高崎からすぐに駆けつけた「中村幸正・Ｙ中君」のことを思う。この事故の僅か１年３ケ月後に彼も逝ってしまった。「義と友情に限りなくあつい」彼は疾風のように駆け抜けてしまい、今はいない。

（＊三国山は上越国境にも岐阜県境にも神奈川県・芦ノ湖近くにもある。山が国を分ける典型例であろう）

それにしても「神流川」の名前の由来は何か。

神（カム）の川が「神名」に転じたとも、神納川、甘奈とも綴られ、古くはカミノ川と言われたのは、武蔵２０余郡の北の果て「上」の国から流れる川だからとも。

異色なのは、砂鉄を採取するための「鉄穴流（かんながし）」を行った川から、と言うのもあるらしいが、確定的なものはないようだ。

7)反省会、新町駅前「万久馬」

＜無事到着、和やかな雰囲気です＞

４時から営業という看板の前で佇んでいたら店のお内儀さんが戸を開けてくれた。時に３時４０分。特別席を提供された。お雛様とは！和む。

今回のウオークも先ず先ず順調だった。

よって、次回の「Y 中墓参り」を含むスケジュールが主体。

佐薙が「富士山検定１級」の合格証書を持って来た。得点は９８点、ミスした２問のうち１問は単純ミスと残念そうだったが、まあ「満点」よりは、いいのでは？！、頭脳は若い、感心、感心。

特別席を提供していただいた割には注文は控えめ？だった。申し訳ない。何しろ昼間の「六助」が未だに「腹に堪えている」んで・・。

終着点・新町駅の少し手前に「明治天皇・行在所」と称して明治１１年の建物がそのままあり、此処にもお雛様が飾ってあった。「天皇の寝所は床下から刺されないようにベッドが天井から吊るしてあった」と気の良さそうな“おばさん”が説明してくれた。

そのすぐそばに「柳茶屋跡」とあり

芭蕉の句**「傘（からかさ）に押し分けみたる　柳かな」とあった。**

（＊芭蕉が１６８８年、木曽を経て信州・更科の月を見、善光寺にお参りして江戸に戻った例の「更科紀行」の道すがら詠んだものかと思ったら、この句は最晩年の１６９４年に江戸で詠んだものという。三重県大山田村にも同じ句碑があるそうだ。引っ張りだこで忙しい）

俳聖・芭蕉の句を評する資格はないが、芭蕉に劣らぬわが「宮川翁」の道中作を載せよう。

＊関八州　山連なりて　春日和　　滝岡橋にて

＊山颪　静まる里の　梅日和　　白梅と旅人と赤城颪のない日だった

＊道の辺に　小さき古墳　土匂ふ　　浅間山古墳

本人は「駄句」というがどうしてどうして、最近はめきめきと上達しているようだ。

“直接表現はいけません。読む人に、夫々思いを巡らせてもらうように”との御説、“はいはい”。

＊Y 中の　故郷近く　山しろし　（四郎詠める・よってこれは俳句ではありません）

附）器用な男で御座る。

１日のウオークで約１００～１５０枚のスナップ写真を撮り、きちっと整理して送ってくれる。

１枚の撮影に１０秒かかるとしても１７～２５分、これを６～７時間のウオークの中で穴埋めしないといけない。

仲間は自分達が写されるときは別だが、それ以外はさっさと行ってしまうんだから・・、全く！

大またで力強く歩く君が頼もしいよ。写真撮影に忙しくて、好きなスケッチの余裕も取れなくて，ごめんよ。　　何時までも達者で、バッテリーも切らさないで、頼みますよ。

＜道中カメラマン・寛二、滝岡橋にて＞

（５）２０１１年３月２日（水）晴れ　新町宿　倉賀野宿　高崎宿　群馬八幡・Ｙ中墓参

佐薙　鈴木　高崎　松尾　宮川　石和田　距離 17.2K、時間 5H55M（4H50M）歩数 29.100

（５：１３　新検見川発　６：１５　上野発　７：５０　新町着）

７：５０　新町駅発　８：００　新町宿・中山道　温井川　烏川緑地　堤防に沿って歩く

９：４０　倉賀野宿入り口　日光・例弊使街道分岐点　倉賀野脇本陣跡　高札場跡　倉賀野神社　安楽寺（山号読めず）

１１：２０　高崎宿入り口　昼食「すかや鶴見店」・反省会？（夕刻はＹ中夫人との懐旧夕食会のため、＃６、＃７の計画試案・佐薙、宮川・心臓バイパス１周年、元気）

１１：４０　すかや鶴見店発・Ｙ中夫人と連絡・治郎　「本町２丁目？」附近でＹ中夫人と出会う（＊Ｙ中家―長男・岳夫君運営―の貸し駐車場、貸しビル・エリア）

１４：１０　群馬八幡駅　Ｙ中夫人と再合流　Ｙ中家用意のマイクロバスにて墓地へ

１４：２５　高崎市立・八幡霊園着　岳夫君先着・待機　線香供え　一同で般若心経読誦　少林山・達磨寺　高崎市役所２１階展望室より関八州の景観満喫

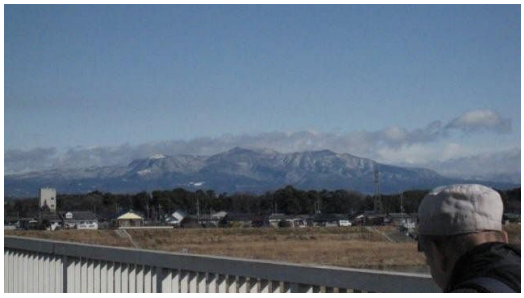
１６：００～１８：００　懐旧懇話会・高崎駅・ホテル・メトロポリタン

１）上州人気質とＹ中、そして赤城山

「**上州江戸っ子**」という言葉があるらしい。**上州人は正直で義侠心も強い。**

平安時代なかばの関東地方に、小領主である多くの武士の家が出現、彼らのあいだで武士道の原型が造られた。古代、律令制に移る前、「國造時代」、此の地域には大和中央政権に逆らっていた上毛野氏（小熊など）という有力な豪族がおり、古墳文化が栄えたていたことは、「甲州道中記」に書いたが、その後、**平安時代なかばに京都から下ってきた源氏、平氏などの系譜を引く武士**

が古代豪族の流れを引く人達に取って代り、古代豪族の文化は滅んだという。（が小生には「大和政権に盾ついた気骨」は受け継がれているように思える・・）



＜上州と言えば赤城山だ＞

その後、戦国時代までは多くの武士が勢力を競いあうかたちが続き、江戸時代は大小名が分立して、上野国全域に影響を及ぼす特定の武士や藩・大大名は現れなかった。**故に江戸時代末までこの地域では中世武士に共通する気風が受け継がれたと言う。**

江戸時代後半からは、**桑の栽培や養蚕、絹織物が盛んになるが、これは女性の仕事である。そのため、上州の女性は働き者になり、現金収入を得て男性と対等、いやそれ以上の男まさりの性格が造られ、尊敬されるようになった。**

江戸時代末には**養蚕家の懐を当てにした博徒が活躍し、上州人のギャンブル好き**の気質が造られた。**上州人は男も女も働き者で陽気で正直で気前が良いといわれる。**

江戸時代の上州には草津、伊香保と言った温泉地や宿場町などの歓楽地が多く、よく働く上州人は、自らを**「上州江戸っ子」と呼んで「宵越しの金は持たない」と歓楽地で気前よく散在した。**

このように、江戸の文化を真似していささか見栄を張って過したが、もともと上州人の気質にも江戸っ子の気質に似たものがあったそうだ。

博徒の親玉、国定忠治とくれば妙義や榛名では駄目でやはり**赤城山・・**、そして、**Ｙ中の生き様を思うに、まさに、これら上州人気質がぴったり！（＊まさしくＹ中は何代も続く上州人の末裔と思えるが、その実は？　誠に意外、それは後述としよう）**

２）日光例幣使街道、（倉賀野～楡の木・壬生道合流点、今市・日光道中合流点、鉢石）

＜倉賀野、中山道・日光例弊使街道分岐点＞

＜道しるべ、従是　右江戸道　左日光道＞

徳川家康は死後、朝廷から神号「東照大権現」を下賜され、日光東照社に祀られ「神」となった。

この東照社（後・東照宮）へは、毎年、家康の命日・４月１６日、の祭礼に朝廷から奉幣使（日光例弊使と呼ばれる）が派遣された。

「例弊使」とは神に祈をささげる「金の弊（ぬさ）」を奉納する為の勅使である。

この例弊使は１６４７年から１８６７年まで２２１年間休むことなく続けられた。

＊「奉幣」（ほうへい）とは天皇の命により神社・山陵などに幣帛（へいはく）を奉献することである。天皇が直接参拝して幣帛を奉ることもあるが、大抵は勅使を派遣して奉幣させ、この使いのものを「奉幣使」と言った。奉幣使には五位以上で且つ卜占により神意に叶ったものが当たると決められていた。例の延喜式には奉幣を受けるべき神社が何んと３１３２座記載され

ているという。神社によっては奉幣使が決まっている場合もあり、伊勢神宮には王氏(白川家)、宇佐神宮には和気氏、春日大社には藤原氏の者が遣わされた。

中世以降、**伊勢神宮の神嘗祭に対する奉幣のことを特に「例幣（れいへい)」**と呼ぶようになり**例幣に遣わされる奉弊使のことを「例弊使」**というのだそうだ。

江戸時代になると朝廷の衰微とともに奉幣のしきたりも次第に縮小、形骸化し、「例弊使」といえば、「日光例弊使」をさすようになった。

朝廷の徳川幕府への敬意（ごますり）で、これだけが残ったと言えそうだ。

＊　例弊使には貧乏な下級公家が選ばれることが多く、日光へ出向くことは大変な「田舎道中」で、心中には「徳川なんぞに」という屈辱の気持ちもあり、朝廷と幕府の権威をカサに着て大変な権勢を振り回し、殊に中山道から分かれて例幣使街道に入るとその増長振りは眼を覆うほどで、横暴の限りを尽くしたという。

駕籠が少しでも揺れると自ら駕籠から飛び出して「人足の不調法で駕籠から落とされた、どうしてくれる」と示談金をせしめた。この行為が後に「**強請（ゆすり)」の語源に**なったとか。

「日光例弊使」は徳川幕府の威光を示すものに他ならず、甲州道中での「お茶壷道中」を思い起こさせる。

「日光例幣使街道」（倉賀野～楡の木・壬生道合流、今市・日光道中合流、鉢石）は誠にご苦労な歴史を背負っているものだ。（＊倉賀野～楡の木は東山道（府中への武蔵路・支道化後）とほぼ同じか？）

３）倉賀野宿、中山道・日光例幣使街道・分岐点の碑、雷電為右衛門

＜勝川春亭画・雷電＞

倉賀野宿、中山道・日光例幣使街道の分岐点には前ページ写真のように、「道しるべ」と「常夜燈」がある。

この常夜燈には、自己の財産を投げ出して建立を発起した髙橋光賢（街道２つ目の宿、五料生れ）始め、問屋、旅籠、著名人３２０名の寄進者の名前が四面に亘り刻まれているが、その中に雷電為右衛門、鬼面山与五衛門など相撲取り３８名の名前がある。

大相撲史上、古今未曾有の最強力士と言われる雷電為右衛門（１７６７～１８２５、江戸本場所３６場所通算で黒星は僅かに１０、勝率９割　６分２厘、身長６尺５寸・１９７Cm，体重４６貫・１７２Ｋｇ）に登場願ったのは、**生地が宮川の「信濃國小県郡大石村・現東御市」、そして妻・八重の生地は下総国臼井（現在の千葉県佐倉市)、引退後は長く妻・八重の郷土で暮らし、墓も佐倉市の浄行寺にあり、何よりも当時の力士としては「高い教養の持ち主」であったことに惹かれたからだ。**

＊　余りの強さに「鉄砲（突っ張り)」「張り手」「閂（かんぬき)」が禁じ手だったという逸話があり、また敗れた１０敗の力士の名前には、陣幕嶋之助、柏戸宗五郎、音羽山峰右エ門・・など、今の親方（株？）にも受け継がれている名前があり、流石、伝統と歴史の古さを感じ

させられる。

小生は**深川の富岡八幡宮（江戸勧進相撲発祥の地と言われる）**に何度か足を運び、境内の「横綱力士碑」６７代武蔵丸まで（白鵬は６９代）を見たが、雷電は何故か横綱免許を受けなかったようで、ここでは「無類力士」として、顕彰されている。

この他、富岡八幡宮には１０４人の歴代大関（小錦、霧島まで）の「大関力士碑」もある。

＊　‘１０年春、「甲州道中」、吉野宿・藤野の増珠寺で**「追手風喜太郎生誕の地」**（大関、相模国津久井郡、現相模原市生まれ）と言う碑を見たが、江戸時代では大関や横綱という巨大？な男を送り出したことは郷土の誇りであったようだ。お相撲さんは関所を手形なしで通れたというし、娯楽の少なかった当時、彼らの社会的な存在が窺える。

４）Ｙ中夫人、気丈で見事なリカバリーに賛辞

「すかや・鶴見店」で昼食。一同、今回はボリューム控えめを注文、佐薙準備の資料で次回スケジュールを打ち合わせ。**宮川が奇しくも丁度１年前の今日は、「榊原」でオペレーション台の上にいたことが披露され、今日の元気さに祝意と快哉。**高崎市の中心、**本町でＹ中夫人と出会う。**この広い駐車場と背後のエンジ色の貸しビル、これらは長男・岳夫君の才覚で築き上げてきたものの１部のようだ。２５年前、Ｙ中逝去、そのあと次男・潔君関連で色々と経済的な苦難に遭遇されたと聞いていたが、立派にリカバリーされているようだ。徳子夫人、流石は上州のご夫人であることよ。

＜中村家所有の駐車場と貸しビル＞

５）Ｙ中の墓に参拝、香華、読経、献酒

Ｙ中は、榛名、妙義、浅間、谷川を背に、東に赤城、日光白根、南に富士、西に多摩、秩父の連山を、足下には碓井、烏川を望む絶好の場所で永遠の眠りについている。

この霊園造成にかかわった彼は一番奥まった一角を中村家の墓所と定め浅草から先祖の霊をここに移し、自らも早々と此処に納まってしまった。彼の墓の後ろは広い公園で早咲きの白梅がほのかな香りを漂わせていた。（＊中村家はもと日蓮宗、今は天台宗）

＜聡俊院泰忍正道居士・1986.11.30 没　５３歳　高崎市立八幡霊園＞

四季折々の情景はさぞかし見事であろう。

老いたる吾ら６人、彼の墓前に香をあげ、般若心経を読誦し、そして種子島名産の「しまむらさき」を供えてＹ中の、み霊の永遠に安らかならんことを祈った。

梅香る　墓前に捧ぐ　読経かな　（宮）

白梅に　連山かすみ　友眠る　（松）

酒の香と　面影きそうか　梅の花　（鈴）

友の墓　酒の香運ぶ　山の風（佐）

紅白の　梅に群がる　目白かな（高）　（横浜・常盤台の豪邸にて詠める）

上毛の　三山（みやま）に抱かれ　君眠る（石）

６）少林山・達磨寺参詣（七転八起・願かけだるま）

群馬八幡駅に徳子さん・岳夫君が用意して下さったマイクロバスで墓参を済ませて、やや気軽になった吾らは、達磨で有名な**「少林山・達磨寺」**を訪れた。何だかＹ中が案内してくれているような気がした。

<両眼を入れた達磨が沢山捧げられている>

インド・香至国の王子として生まれた達磨は梁の武帝の時代、中国にわたり、**崇山、少林寺で面壁九年という修行を重ねた。七転八起、面壁九年の不屈の精神は日本では宗派を超えて親しまれ、慕われ、信仰されている。**

（＊小生はかって中国・河南省・鄭州から西へ１００Km 余、中国五岳の一つ、崇山の麓の少林寺を訪ね、達磨が九年もの間座っていたので、その影が岩に写ったという洞窟を見たことがある）

此処、少林山達磨寺は１６９６年に厩橋（前橋）城主酒井忠清・雅楽頭？が水戸光圀に頼んで、中国僧心越禅師を迎えて、禅の道場として開いたと言う。

天明の飢饉（天明２～７年、1782～1787）の後、農民救済のため九代東嶽和尚は心越禅師の描いた達磨大師の図を手本に木型を作り、農家の副業として張子達磨を作らせ、七草大祭で売らせたところ評判になり、今日の隆盛を見たという。

この「だるま」の形は初めは「繭・まゆ」のように中ほどが絞れて細長いものだったようだ。また、養蚕農家が七転八起にあやかって蚕の起き（目覚めー４度脱皮する）が良くなるよう祈願して片目（向かって右）に墨をいれ、やがて蚕が良い繭を作ると残った片目にも墨をいれ、祝ったという。これが「願かけだるま」の起源であろう。

お寺の小さなお堂の中に、願をかけ、叶ったお礼に両眼に墨を入れた達磨が沢山納められていたが、その中には、福田赳夫、中曽根康弘、小渕恵三の達磨があった（何故か福田康夫のものはまだ無かった。不本意ということかな。因みに、明治以降首相を輩出した県のトップは山口県で８人、群馬、岩手が各４人だが、戦後となると群馬が４人で一位だ。群馬はどこへ行っても道路

が良いとか？）

いずれにしても、**七転八起、不屈の精神は上州人の中に息づいているようだ。**

７）高層ビル・高崎市役所・中核都市、群馬交響楽団

高崎城（1428 年、この地の豪族、和田義信により築城された和田城だが、箕輪城に入った井伊直政が 1598 年に、より便利な場所へと，和田城を高崎城と改め入城、以降、諏訪、酒井、松平、安藤氏が 1871 年まで）の城跡に２１階建ての真新しい庁舎が建つ。

入り口には「２０１１年４月１日、中核都市へ」と大きな横断幕が掲げてあった。（政令指定都市は良く聞くが中核都市とは？ミニ政令指定都市か、人口３０万人以上に資格あり、現在４０都市、神奈川・横須賀、埼玉・川越、長野・長野、栃木・宇都宮など。「福祉分野などで少し自治権が増えるもの、高崎は人口３６万、一番最近になってこんな高層庁舎を建てた都市」と岳夫君がやや自嘲気味に説明してくれた。

それにしても、この２１階・展望フロアーからの眺めは絶品？眺望千里、山、川、平野、道路、鉄道・・。恐れ入る情景。

眼下に奇妙な建物が見えた。これが、群馬交響楽団の本拠地・群馬音楽センターである。

アントニン・レーモンド（1888～1976　チェコ生まれ）**の設計により１９６１年に竣工した日本におけるモダニズム建築の代表の一つとされるものだ。**

＜レーモンド設計の群馬音楽センター＞

（＊レーモンドと言われてもピンと来なかったが、博学の鈴木は知っていた。彼はフランク・ロイド・ライトのもとで学び、１９１９年、帝国ホテルの建設の際、来日、戦前・戦後、日本の建築に長くかかわり、モダニズム建築の作品を多く残している。身近なところでは１９３４年に東京女子大学礼拝堂　聖心女子大学修道院及び教室、上智大学６号、７号館などなど）

市から１億（実際は２億、当時の市の予算は７億）、市民の寄付から１億、合計３億円で建設された。市もよく出したが、それ以上に高崎を中心とする市民の貢献に頭が下がる。

「理想の公共建設」と評されたこともあるという。（＊老朽化が進み、建て替えか？岐路にある）

此れをもたらしたのは、取りも直さず１９４５年・終戦の年、「高崎市民オーケストラ」としてスタートした「群馬交響楽団」の存在である。

飛びぬけた富豪がサポートするわけでもない日本の芸術的風土にあって、このような楽団を維持運営することの苦しさを想像するにつけ、６５年を超えて尚、高いレベルを維持してきている「群響」の関係者に、そしてこれを支援し続けている**「上州人の文化性、気骨」に心から賛辞を送りたい。**

８）Ｙ中家のルーツ、初めて知る彼の出自、岳夫夫妻の活躍・・

高崎駅・隣接のメトロポリタン・ホテルで Y 中を入れて７人の懐旧談は実に中身の濃いものであった。（＊献杯ではなく、Y中も入れて８人で杯を挙げ、歓談となる）

＊　先ずはY中逝去してから２５年、この間の徳子夫人（子息２人の成長と困惑・・）の気丈夫な健闘を聞き、敬意と賛辞を送った。

Y中の早すぎる逝去、その後に彼女を襲った経済的、社会的、人間的な苦痛、・・、良くも挫けることなく、中村家の新体制を再構築されたと感心する。

＜Y中の写真を交えて献杯、彼もグラスを上げて、話始めそうだった＞

＊Y 中のルーツは実は上州ではなかった。石和田が上総・千葉であることから、Y中がよく「俺のところは房洲・鴨川だ」と親しみを込めて言っていたことは覚えているが、それ以上のことは詮索もしなかった。

＊徳子さんが語るところによれば、Y 中の父親は鴨川の生まれで次男、東京に出てきて材木屋に奉公、戦中・戦後の混乱の時期に上州・高崎に引っ越してきたそうだ。

＊　Y中は従って目白の川村学園（当時は男女共学）に入学したが、疎開で高崎に移ってきた。転校に当たって高崎商業から出された条件がなんと「学校に野球のバックネットを寄付してくれたら」というものだったそうだ。流石、上州というところか！

とてつもない条件を出す方も方だが、それを受け入れた中村父も江戸っ子気質か？（艶福家でもあったようで、ご夫人と思しき女性が何人かいたようだ。此れを見ながら成長した彼は徳子さんとの結婚に際して、子供は要らないと吐露したとか。徳子さんもこれらの夫人と折り合いをつけながら若き日を過したのだから、こちらも大したものだ）。

＊彼の負けじ魂に火がついた。Y中の IQ は高かったに違いない。大学で出会ってからの彼は少しも勉強しているようには見えなかったが、M の簿記の答案を「満点にはならないように出しておいた」なんて言っていたようだ。よき時代であった。

＊彼の残したものは数多いが２人の息子さんもその最たるもの。

長男・岳夫君は高崎が好きで、今やビル、駐車場経営など地元に密着して着々と事業を拡大しているようだ。そして、異色の奥さんと睦まじく過しておられる。徳子さんに言わせれば、間もなく主人の逝くなった年齢になると、過ぎていった日々を感慨深げに話されていた。

＊岳夫君夫人は「吉永南央」の筆名で推理小説を書かれる才人、「紅雲町のお草」で第４３回・オール讀物・推理小説新人賞を受賞、「紅雲町ものがたり」「誘う森」「Fの記憶」「オリーブ」「アンジャネ」、（秩父地方の方言で“案ずることはない”、夫人は秩父の旧家のお生まれ）など、ほぼ１年に１冊のペースで出版しておられ、今や出版社の担当者が東京から高崎まで打ち合わせにやって来るほど、という。他方、次男・潔君は相変わらず事業意欲旺盛、失敗をこれからに生かすとの意気込みで、高崎を離れて頑張っているらしい。

＊　この徳子さんの気丈夫、頑張りは「生粋の上州人？」と受け取れるが、なんと徳子さんの出身は「美濃、岐阜」だそうだ。

不思議なものだ。Y中も徳子さんも上州生まれでもその血を引いているわけでもない。

それなのに、我々の眼には、もう何世代もこの地で育まれた血を循環させておられるように見える。置かれた地域の風土、気質、環境に誠に見事に適合して居られる様だ。

これは、何だろう？偶然か、巡り会わせか？柔軟な適合性か？・・・解らないが偉大なことだ。

Y中よ、とても語りつくせないが、残されたご家族は今こうして過ごして居られる。瞑すべし。

２５年　亡き友の妻　メリーウイドウ　　（佐）
風光る　野を流れ行く　烏川　　　（宮）
俺もなあ　楽しかったぞ　オーション会　（石）

２０１１年３月１１日午後２時４６分、突如発生したＭ９．０の未曾有の大地震、東北・関東大震災。地震、津波、原発の事故という今までに経験したことのない大災害をもたらした。

死者、行方不明者は２万人を超えると予想され、原発事故による放射性物質の漏えいは多くの避難民を生み出している。

通信、交通、食料、燃料、医療、・・、国民生活に測り知れないダメージを齎している。

これはまさに国難である。（後に、東日本大震災　と呼称）

このときに当たり、佐薙リーダーから「吾らのウオークは当分の間は中止としたい」との提案があり、直ちに合意された。

メンバーの中には「身体さえ良ければボランテイアーとして現地へ行って何か役に立ちたいと思うほどだ」という声もある。

如何に大災害でも、吾ら日本人はこの苦難から必ず立ち直るであろう。

敗戦の惨状から戦後の復興、繁栄を築き上げた民族なのだから。

２０１１年３月３０日・四郎・７８歳の日、擱筆

オーション俳壇・句集

＊ 俳号なし、句（九）に及ばず、五・六（語録）ほどか。 川柳、戯れ唄（本格的に取り組んでいる宮川宗匠を除く）それでも良し、五感に映るそのままを言の葉に。

＊ 正式な**「オーション俳壇・句集」**は松尾寛二撰により別途刊行されるだろう。

＜2011.2.16＞

・ 関八州 山連なりて 春日和 （宮）＜ 深谷・本庄間 小山川滝岡橋附近＞
・ 山風 静まる里の 梅日和 （宮）＜ 々 碑と白梅と旅人と 赤城颪のない日だった＞
・ 道の辺に 小さき古墳 土匂ふ（宮） ＜ 々 本庄・新町間 浅間山古墳＞
・ 中山道 うどんの峰を 越えそこね（鈴）＜々 深谷・本庄間 六助うどん・巨大盛り＞
・ 六助山 五合目あたりで SOS（鈴） ＜々 々 ＞
・ 六助うどん カルチャーショックと 友は言い（佐）＜ 々 ＞
・ Y中の 故郷近く 山白し（石）＜深谷の辺り葱畑の向こうに 赤城、谷川、榛名、浅間＞

＜2011.3.2＞

・ 上毛の 空に三山 花菜（はなな）晴（宮）＜烏川河川敷から＞
・ 風光る 野を流れ行く 烏川（宮）＜烏川、春の日差し＞
・ 山笑ふ 老（おい）六人の 中山道（宮）＜春の色＞
・ 蠟梅の 香に華やげり 達磨寺（宮）＜達磨寺にて＞
・ ようこそと 赤城颪に 迎えられ（石）＜すかや・で昼食後、やはり、風は肌を刺す＞

＜2011.3.2 Y中の墓前で＞

・ 白梅に 連山霞み 友眠る（松）＜Y中の墓前から四周を見わたせば・・＞
・ 酒の香と 面影きそうか 梅の花（鈴）＜墓の裏に梅の古木あり＞
・ 友の墓 酒の香運ぶ 山の風（佐）＜種子島焼酎・しまむらさき を＞
・ 梅香る 墓前に捧ぐ 読経かな（宮）＜白梅の老木が寄り添うように＞
・ 霊峰の 見守る墓や 春浅し（宮）＜山々に囲まれて＞
・ 春北風（はるならひ）友の墓前に 美酒供ふ（宮）＜しまむらさき を墓石に＞
・ 上毛の 三山（みやま）に抱かれ 君眠る（石）＜安らかに・・＞
・ 紅白の 梅に群がる 目白かな（高）＜墓地の梅と横浜・常盤台邸のそれとを重ねる＞
・ 春の空 赤城榛名に 妙義山（宮）＜上毛三山、悠然たり＞

＜三街道を振り返りつつ＞

・ ３０キロ べそかく友あり 街道ウオーク（佐）＜東海道、詠まれているのは誰だ？＞
・ トラックが くれる強風 鈴鹿越え（佐）＜東海道、これは 凄まじかったなあ＞
・ 信玄公と 公つけて呼びます 甲斐の人（佐）＜甲州道中、信玄は今も名君！＞
・ 宿の酒 からにしました 諏訪の宿（佐）＜甲州道中・諸説紛々・・、酒がすすむこと＞
・ ２５年 亡き友の妻メリーウイドウ（佐）＜気丈夫に若く明るく上州夫人の鏡？＞
・

オーション会ウオークにはまた一つテーマ？が加わって、ウオークに厚みが増したようだ。
これからは、更に感性を磨き、言の葉　を嗜む力を高めることが必要である。
宮川宗匠の蒔いた種、有難く受け止めることとするか。

＜東日本大震災によせて、朝日新聞の歌壇、俳壇 2011-4-10　ほか＞

・　こんなにも　悲しく響く　東北弁　聞きたることなし　巨大地震は
・　津波退きし　瓦礫の山に　雪つもる　これが東北と　いうがごとくに
・　いくつもの　町呑み込んで　津波去り　瓦礫の遺体に　立つ赤い旗
・　遺体ある　瓦礫に印の　赤い布　手を合わす母あり　隣にも
・　東北の　棺の並ぶ　体育館　卒業生が　立つはずの場所
・　春彼岸　津波寄せ來し　浜に立つ　我が曽祖父も　波に消えたり
・　大地震の　間なき余震の　その夜を　あわれ二時間　眠りたるらし
・　ぶしつけな　問いにも　静かに答えるは　父母を波に　さらわれし人
・　避難所の　人みな人を　気遣いぬ　人とはかくも　美しきかな
・　立ち直る　しかないねと言う　被災者の　深き目皺の　ひとすじの涙
・　もう安否　問ふこともなき　人の名が　ふいに洩れくる　地震（なゐ）続く夜は
・　好きな海　悪魔の舌と　なりし日を　受け入れがたき　現実幾日
・　襲い来し　東日本の　大津波　大蛇（おろち）の群れや　呑みゆく様は
・　あらためて　四方海と思う　弓なりの　小さき列島　涙ぐましも
・　揺れている　余震の揺れか　身の揺れか　オロオロおびえ　十日は過ぎぬ
・　万人余　殺して狂ふ　春の地震（なゐ）　美しきみちのく　地獄図と化す
・　地震の中で　赤ちゃん生んだ　お母さん　温かいシチュー　届けてあげたい（松田　わこ）
・　炊き出しを　笑顔で手伝う　中学生　青いジャージーに　粉雪が振る（松田　梨子）
・　過疎採るか　原発採るか　この地にも　決断迫る　時勢のありき
・　薄氷を　踏みいるごとき　幸せと　思い知らさる　原発の事故
・　挨拶は　あれから変わり　人はみな　会えば云うなり　ご無事でしたか
・　姿見ぬ　人に二種あり　原発の　内部作業者　最高責任者
・　古きほど　汚れたるほど　誇れるを　政治家は着る　新品ナッパ服
・

・　春寒し　一歳とある　死者名簿
・　被災地へ　気は逸りつつ　雪間行く
・　無事と言ふ　声春雷を　聞きしごと
・　北国に　水温む日の　早かれと
・　節電は　御用学者が　出たら切る（川）

・言葉より　先に涙や　春の空
・壊滅の　國とも知らず　地虫出づ
・空を向く　漁船の腹や　鳥雲に
・何事も　なかったように　波がよせ（川）

＜東日本大震災を詠める・四郎の駄作＞

・　ああ舟が　陸に向かって　流れ行く　この世の悪夢　なす術も無く

・　押し寄せる　津波に呑まれる　惨状を　座して見詰める　我は何もの

・　凄まじき　人のつくりし　ものすべて　残れよ東北　不屈の魂

・　共に耐える　軽き財布の　底払い　僅かに心の　救いを得たり

・　遠国の　友より届く　激励の　メールにありし　レジリアンス（resiliance）だ

＊苦境を跳ね返す底力

・　山田町　へいちゃんの町　名のみあり　情報もなく　跡形もなし

＊岳友、佐藤博君のこと

・　人類が　傷つけ過ぎし　傷痕を　元へ戻せと　自然の慟哭

・　１（ひと）月を　経れど今なほ　襲い来る　あと幾月を　耐えろと云うのか（2011.4.11）

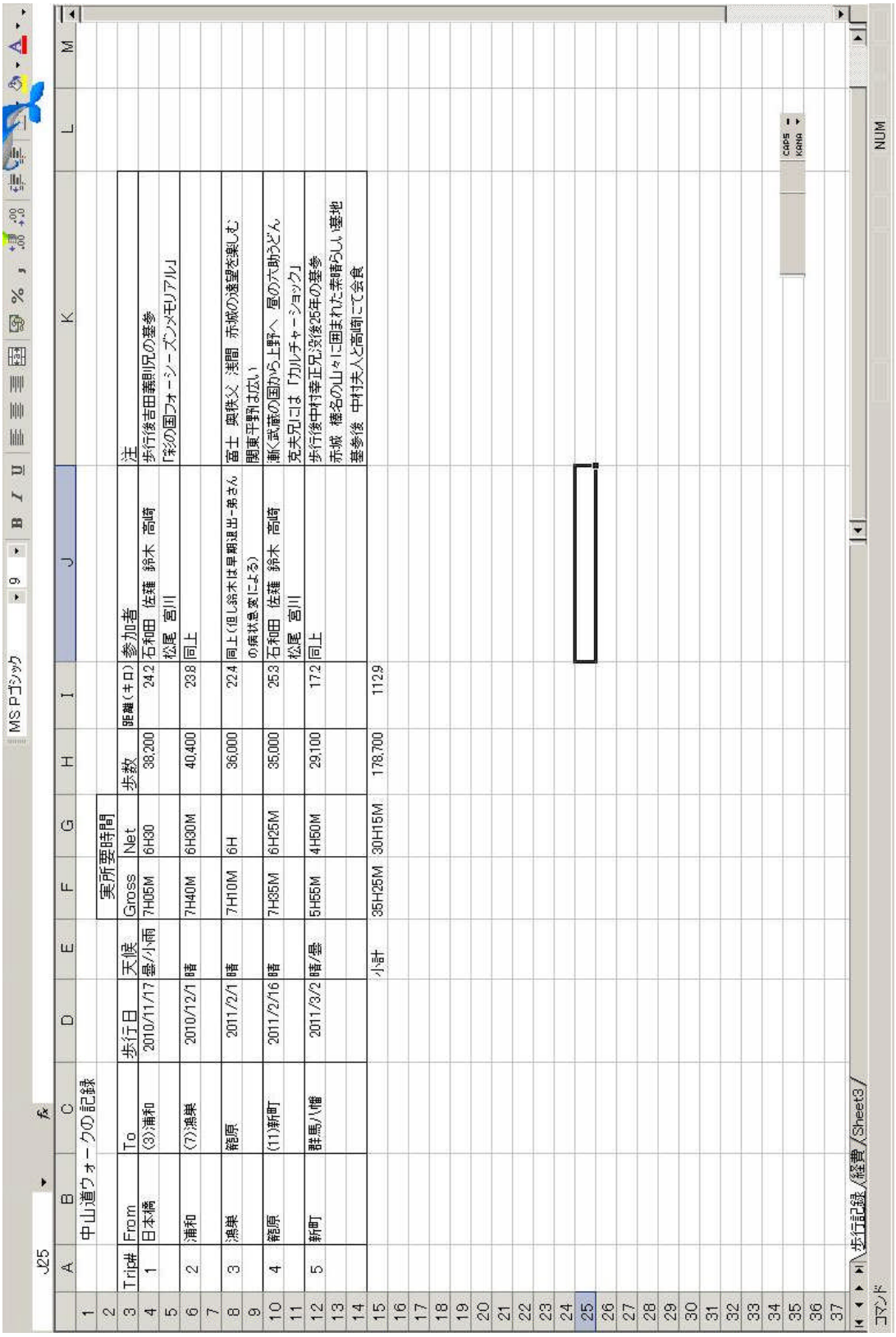
・　防災を　声高にして　選ばれし　政治家どもよ　実で応えよ（2011.4.11）

・　家も舟も　車もすべて　波に失せ

・　祈るより　ほかにすべなき　我あわれ

・　くり返す　揺れが身体に　住みつきて

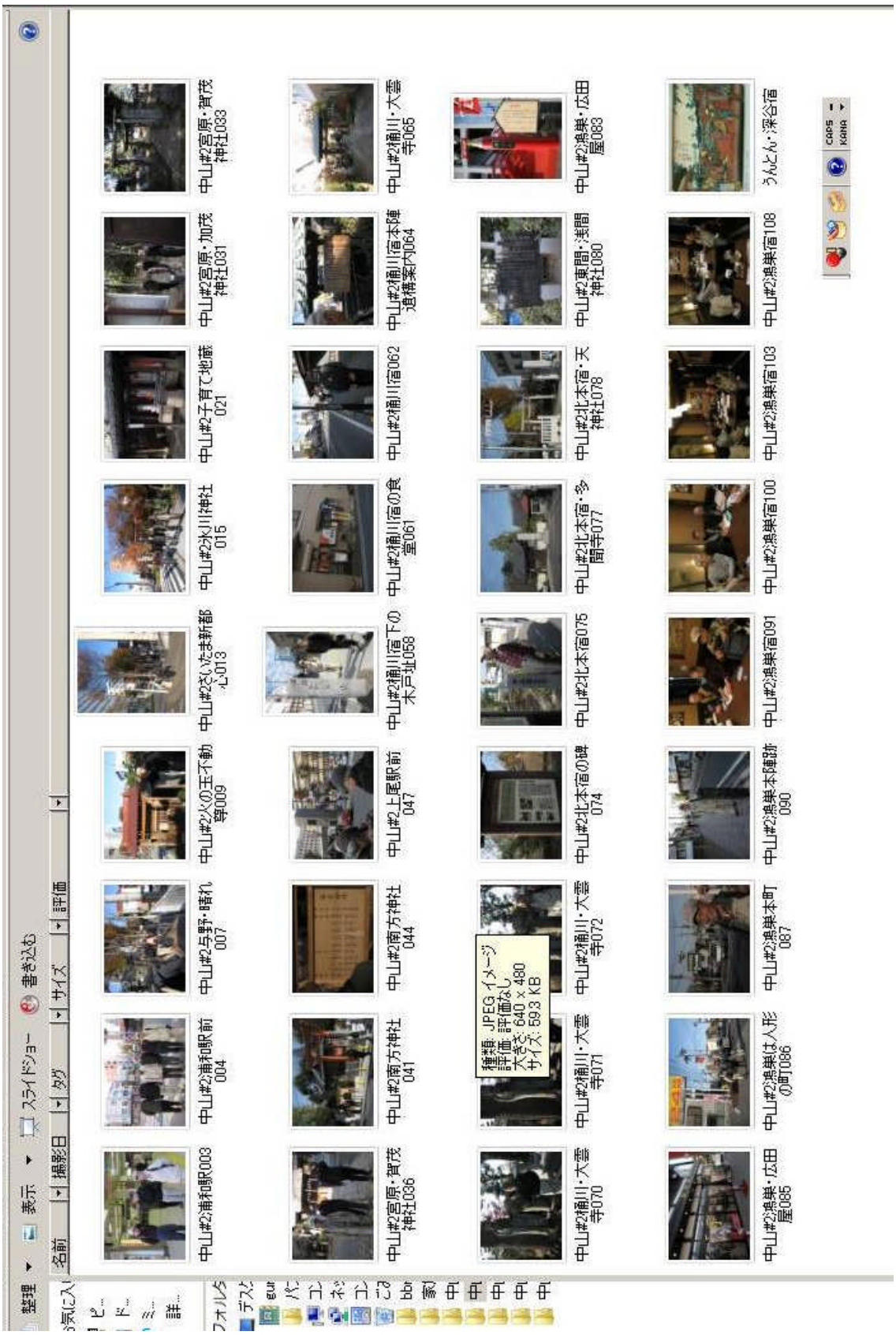
［中山道ウオークの記録］　日本橋～高崎・群馬八幡　佐薙作成・公式記録



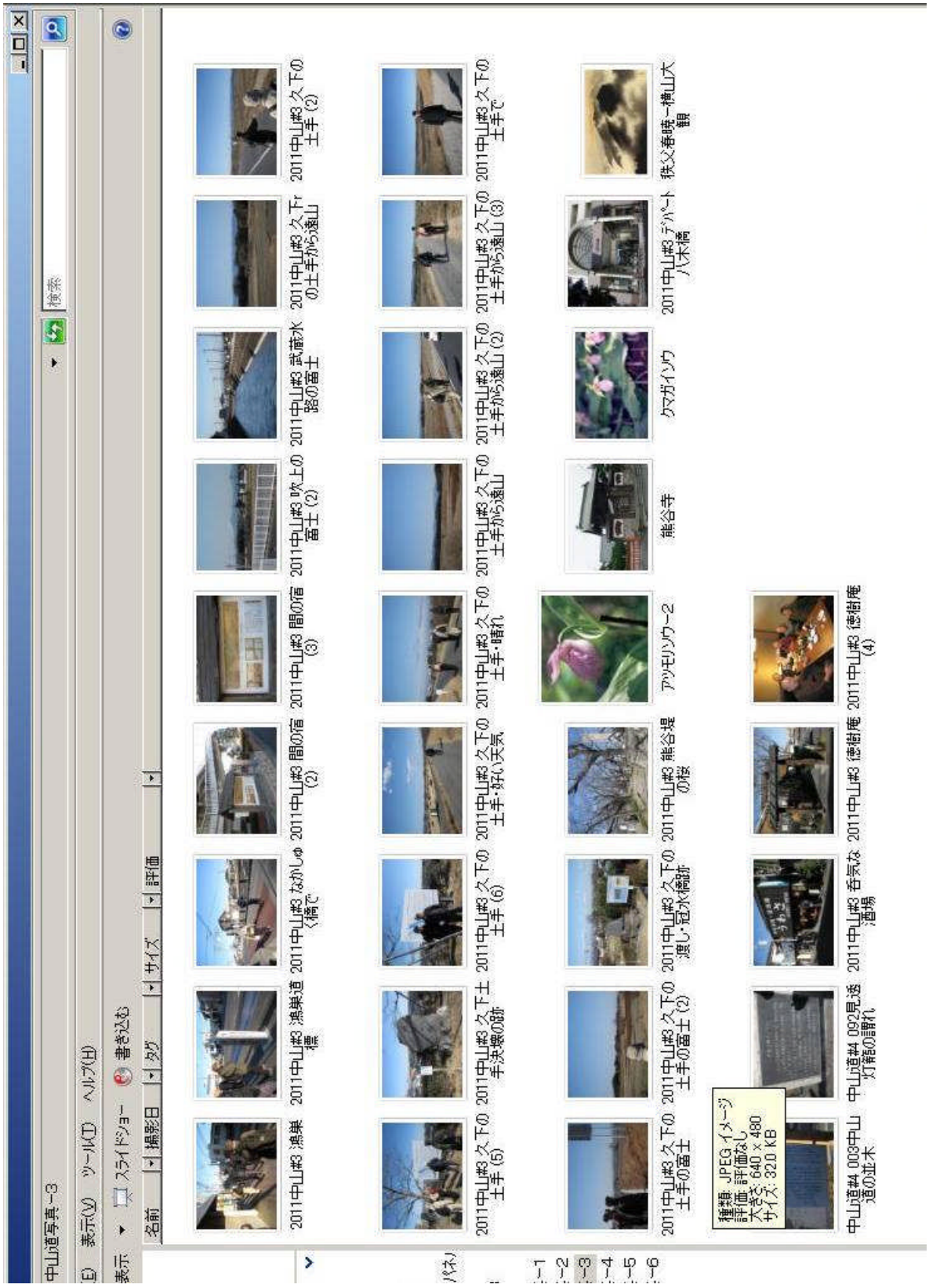
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1		中山道ウォークの記録											
2						実所要時間							
3	Trip#	From	To	歩行日	天候	Gross	Net	歩数	距離(キロ)	参加者	注		
4	1	日本橋	(8)浦和	2010/11/17	曇/小雨	7H05M	6H30	38,200	24.2	石和田 佐薙 鈴木 高崎	歩行後吉田義則兄の墓参		
5										松尾 宮川	「米の国フォーシーズンメモリアル」		
6	2	浦和	(7)鴻巣	2010/12/1	晴	7H40M	6H30M	40,400	23.8	同上			
7													
8	3	鴻巣	籠原	2011/2/1	晴	7H10M	6H	36,000	22.4	同上(但し鈴木は早期退出-弟さん	富士 奥様父 浅間 赤城の遠望を楽しむ		
9										の病状急変による)	関東平野は広い		
10	4	籠原	(11)新町	2011/2/16	晴	7H35M	6H25M	35,000	25.3	石和田 佐薙 鈴木 高崎	新(武蔵の国)から上野へ 昼の穴助うどん		
11										松尾 宮川	克夫兄には「カルチャーショック」		
12	5	新町	群馬八幡	2011/3/2	晴/曇	5H55M	4H50M	29,100	17.2	同上	歩行後中村幸正兄没後25年の墓参		
13											赤城 榛名の山々に囲まれた素晴らしい墓地		
14											墓参後 中村夫人と高崎にて会食		
15					小計	35H25M	30H15M	178,700	112.9				
16													
17													
18													
19													
20													
21													
22													
23													
24													
25													
26													
27													
28													
29													
30													
31													
32													
33													
34													
35													
36													
37													

[　中山道写真―1]日本橋～浦和（２０１０－１１－１７）松尾寛二撮影

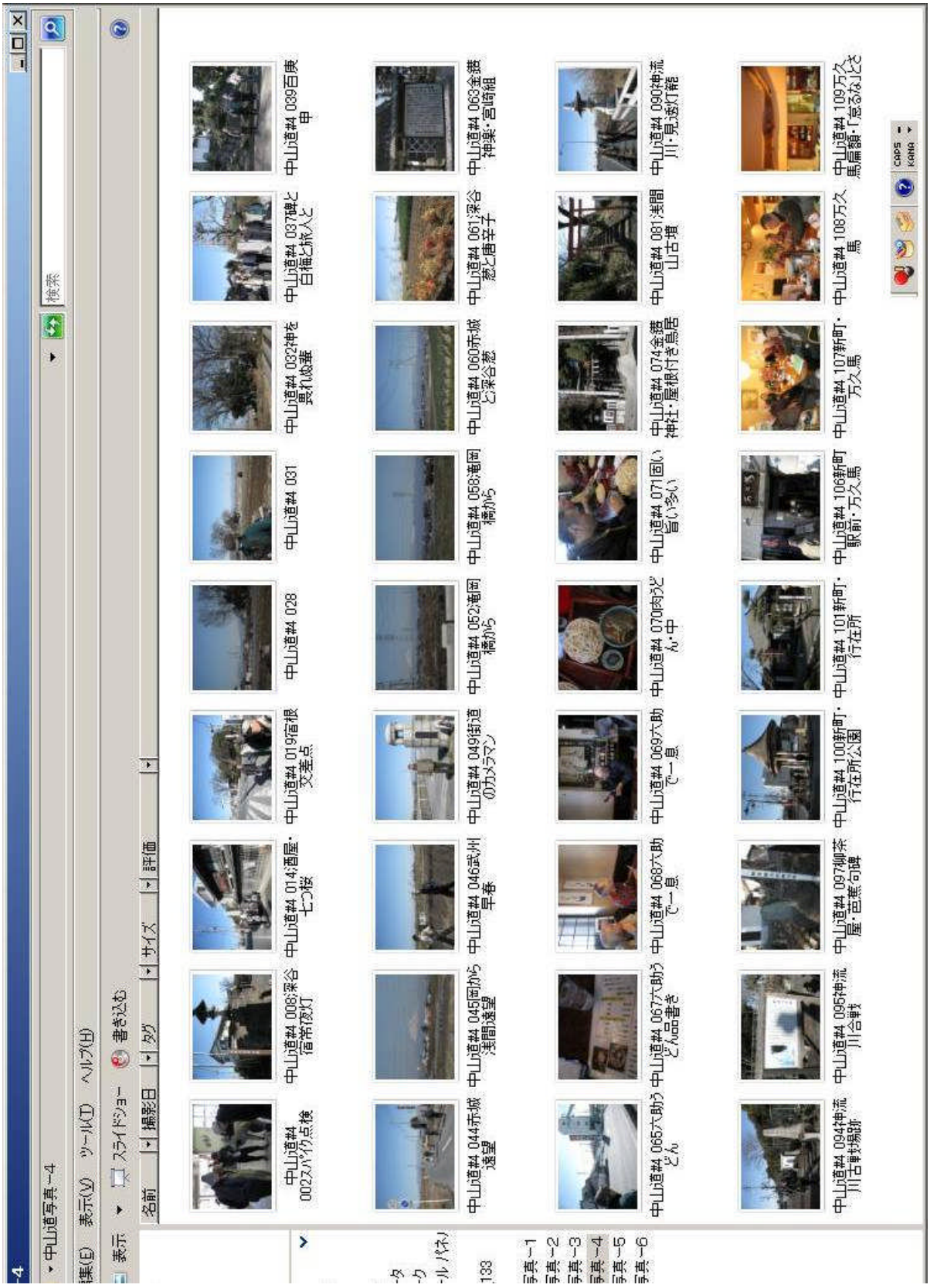
［　中山道写真―２］　浦和～鴻巣（２０１０－１１－３０）松尾寛二撮影０



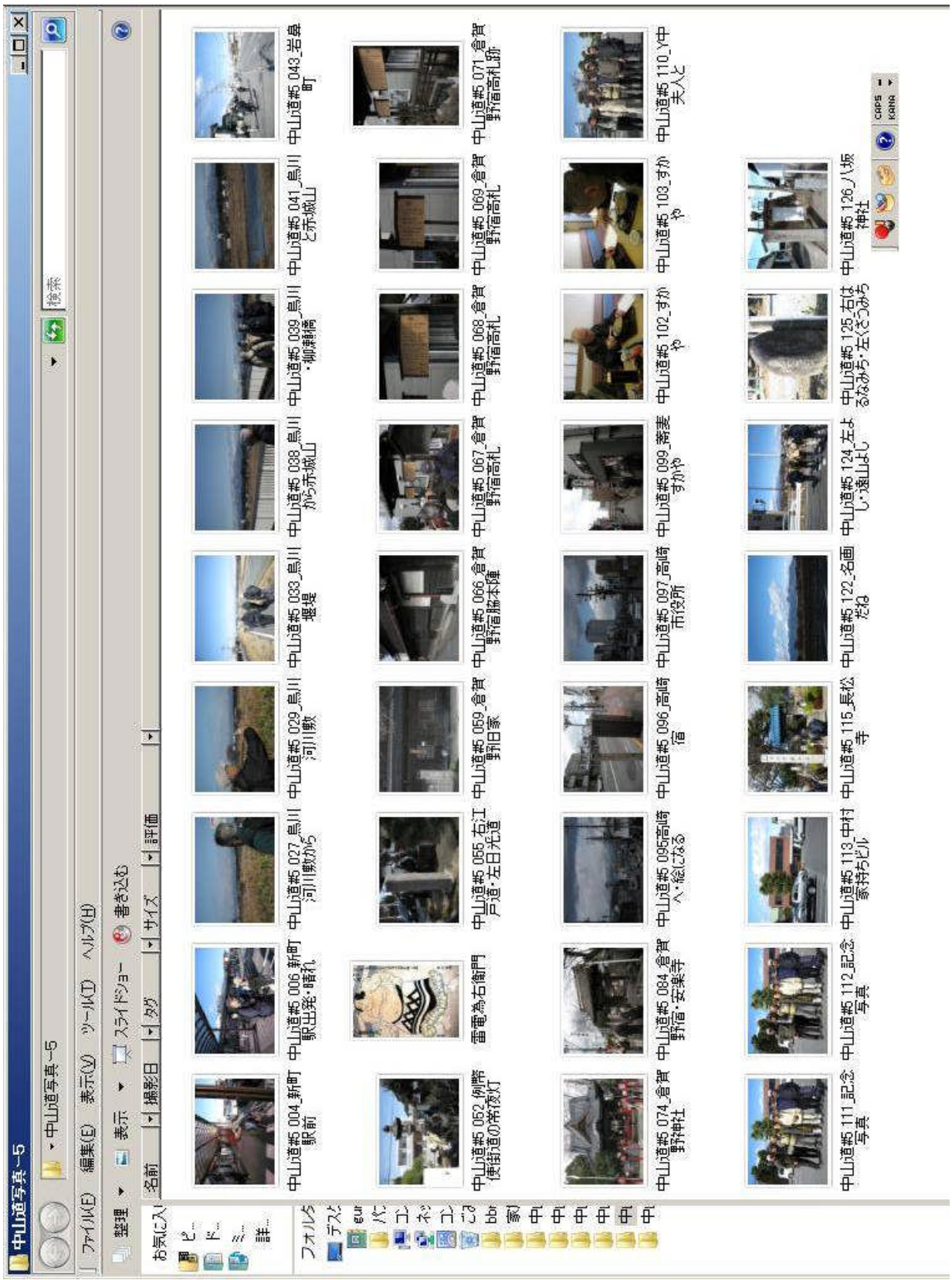
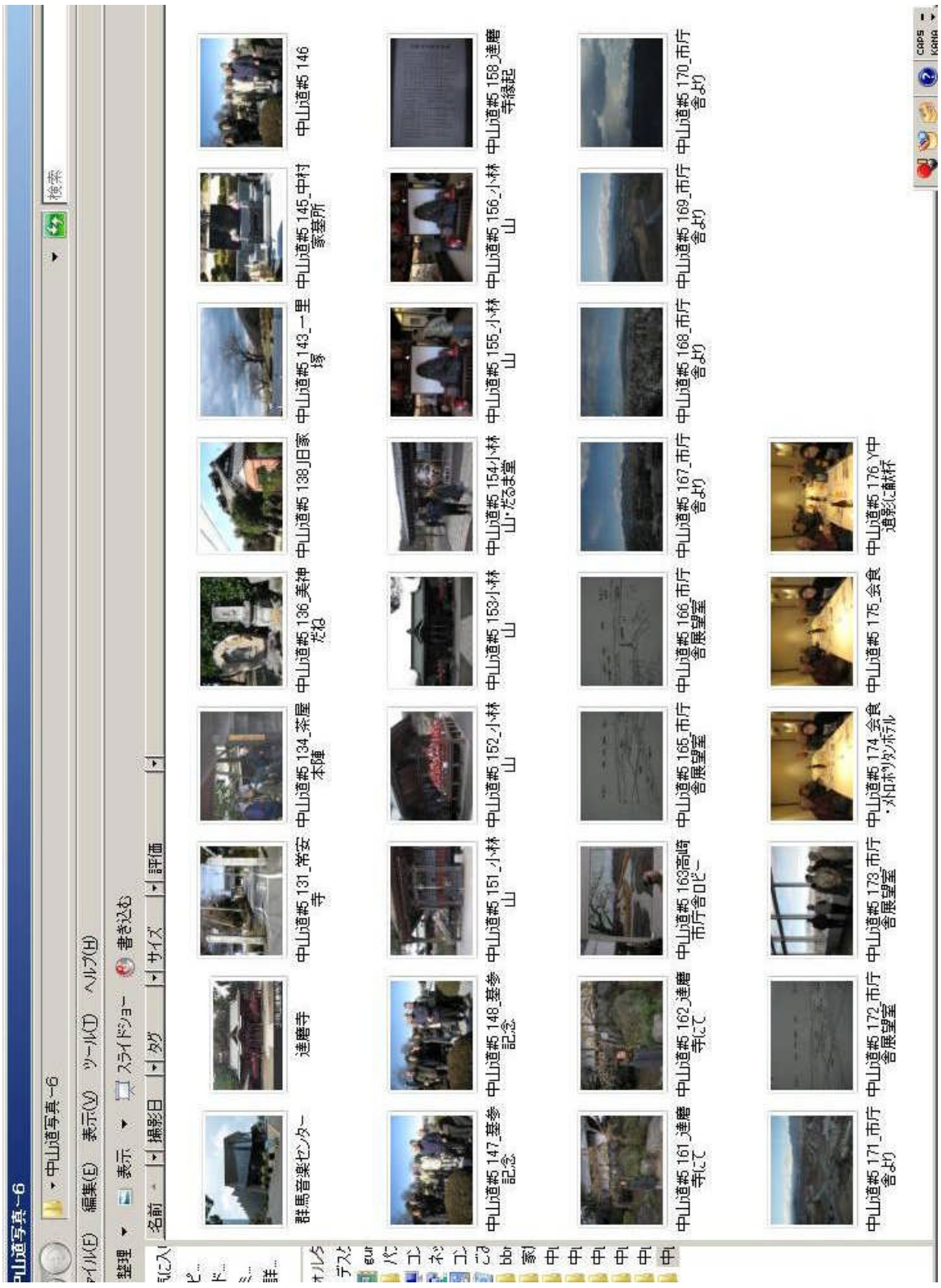
［中山道写真―３］鴻巣～熊谷・籠原（２０１１－２－１）松尾寛二撮影



［中山道写真―４］熊谷・籠原～新町　（２０１１－２－１６）松尾寛二撮影



［中山道写真―５-1］新町～高崎・群馬八幡（２０１１－３－２）松尾寛二撮影



［中山道写真―５-2］新町～高崎・群馬八幡（２０１１－３－１）松尾寛二撮影